

アイデンティティ拡散傾向の母親の類型と 育児不安との関連

宮本 純子

The relation between the category of identity diffusion and
child-care-anxiety of mothers

Junko Miyamoto

Abstract

This study examines the relation between the category of identity diffusion and child-care-anxiety of mother from a viewpoint of ideal versus real life course. A total of 1726 mothers of small children participated in the survey. They were classified six identity status. 276 mothers indicated identity diffusion status. These mothers were classified into two groups. Group I: mothers who could choose their ideal life course. Group II: mothers who could not choose their ideal life course. The results show that each group is categorized to four type. Group I has type that doesn't positively received one of past, present or future, and all time from the past to the future. Group II has two type that is strong and weak self-determination in four type. Child-care-anxiety is high in mother having a low present fulfilment on Group I and it is important to make moderate self-determination in the relations with the family on Group II.

Keywords: identity diffusion, child-care anxiety, self-determination, time perspective, life course

1. 問題と目的

内閣府（2006）の調査では、「希望」のライフコースを実現している女性は半数程度であるとされている。女性が結婚や出産において、どのようなライフコースを選択するかということはその後の人生において重要である。「希望」のライフコースを実現できなかった女性は、その葛藤を内面に抱え込んでいる可能性があるのではないだろうか。

田中（2001）は、近年の育児不安を生活不安、母親自身の人生の不安と述べた。岡本（2002）は成人期女性の生涯発達について アイデンティティ“危機→再体制化→再生”のプロセスを提唱している。育児期の母親の中で「希望」のライフコースを選択できず、危機に直面し、

再体制化できずにアイデンティティが拡散し、人生に不安を感じている母親とは、どのような特徴をもつのであろうか。最近急増している子育てが一段落した数年後に訪れる自分自身の生活に展望を持たないという不安を訴える母親（大日向，2002）は、アイデンティティ危機に直面していると言えないだろうか。加藤（1983）は、現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者をアイデンティティ拡散地位と定義した。

都筑（1993）はアイデンティティの獲得のためには、時間的展望が確立される必要があるとし、アイデンティティの達成は、過去、現在、未来の時間的流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つと述べた。アイデンティティの感覚の一つの側面は、現在が過去に根ざし、過去の上に現在の自分が確実に築き上げられているというような意識と確信であり、このような確信の上に立って個人の未来がはっきりと具体性をもって現実的なものとなる（比嘉・岡本，2007）。また、アイデンティティ形成について畑野（2010）は、様々な文脈の中で社会や他者といった様々な「他者」との関係性の中で自己を定義づけるプロセスであると述べている。社会状況や文脈の変化の中で、どの領域において自らのアイデンティティを形成するかは、自己決定するという主体性と関連することを指摘している。このようにアイデンティティの獲得や形成は時間的展望や自己決定感と関連し、現在の生活に影響を及ぼしていることが推察される。時間的展望や自己決定感の様相を把握することができれば、アイデンティティ拡散傾向の母親の特徴を把握することが可能になると考える。

一方、宮本（2008）はアイデンティティの統合と育児不安の関連を調査し、アイデンティティ拡散地位の母親は育児不安が高いことを報告した。しかし、アイデンティティ拡散地位の母親の詳細と育児不安については検討されていない。アイデンティティ拡散地位の母親の特徴と育児不安との関係性を把握することができれば、アイデンティティが拡散している育児不安の高い母親の中でもさらに育児不安の高い母親の特徴が明らかになり、育児不安を軽減するための援助方法について検討することが可能になると考える。

そこで、本研究では「希望」のライフコースを歩んでいる母親とそうでない母親では、時間的展望・自己決定感の様相に違いがあると予想し、希望と現実のライフコースが一致した群（以下、一致群）と一致しなかった群（以下、不一致群）に分け、以下の二つを目的とし、一致群と不一致群について比較検討する。

- (1) 時間的展望と自己決定感を手掛かりにアイデンティティ拡散傾向の母親を類型化する。
- (2) アイデンティティ拡散傾向の母親の類型と育児不安との関連について検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

A市の乳幼児を持つ母親1726名（公民館の育児サロンに参加している母親803名、保育園に子どもを通わせている母親923名）を対象とした。平均年齢は34.20歳（SD 5.48）であった。子どもの数は、1人が49.13%、2人が37.60%、3人以上が13.27%であった。

(2) 調査手続き

2010年9月から12月に、A市内の公民館と保育園に質問紙調査を依頼した。公民館は主に質問紙の配布を依頼し、後日、筆者が直接回収した方法と郵送で回収した2通りの方法をとった。保育園は先生に質問紙を依頼し2週間後に回収した。なお、研究協力の依頼文に、研究目的、回答内容が漏れないこと、個人が特定されないことを明記した。

(3) 調査内容

ライフコースを問う項目 就業継続型、再就職型（すでに就業している）、専業主婦型（ずっと専業主婦の予定）、再就職希望型（育児がひと段落してから就業希望）の四つのライフコースから、現在のライフコースと希望していたライフコースを記入してもらった。

育児不安を測定する項目 宮本（2013）の作成した育児不安尺度を使用した。この尺度は、育児行為の中で持続し蓄積された不安の状態を問題とした牧野（1982）の育児不安尺度に岩田（2000）の母親の不安尺度などを加え、新たにつくられたものである。“閉塞感・犠牲感”、“疲労感”、“自信のなさ”、“離反願望”の4因子からなり、代表的な項目は、順に“子どもとばかりいて孤立した感じがする”“毎日くたくたに疲れる”“自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある”“子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある”である。全17項目4件法である。育児不安全感項目の α 係数は.79であり、十分な信頼性と考えられた。

アイデンティティ地位を判定する項目 アイデンティティ拡散群を抽出するため、加藤（1983）の作成した自我同一性地位判定尺度を使用した。「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入の希求」の3つの水準からなり、6つの同一性地位（同一性達成地位、同一性達成－権威受容中間地位、権威受容地位、積極的モラトリアム地位、同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位、同一性拡散地位）に分類される。12項目6件法である。

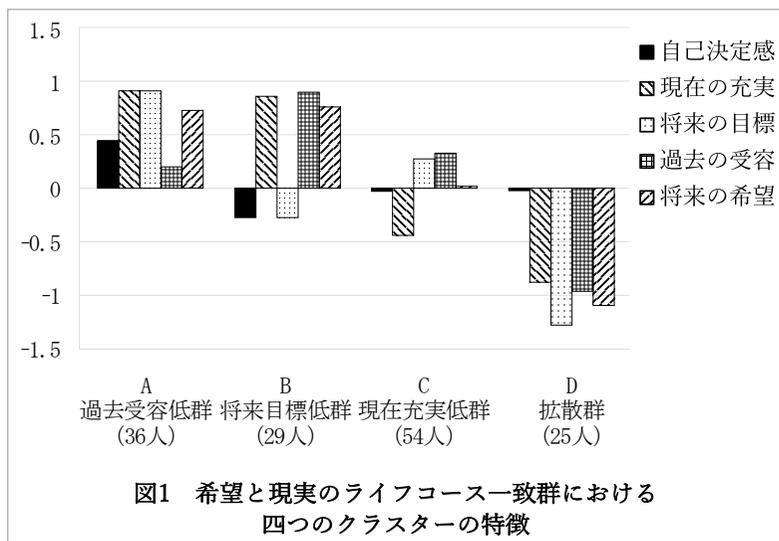
時間的展望を測定する項目 白井（1994）の作成した時間的展望体験尺度を使用した。この尺度は、“現在の充実感”、“目標指向性”、“過去受容”、“希望”の4因子からなり、代表的な項目は、順に“毎日の生活が充実している”“私には、だいたいの将来計画がある”“過去のことはあまり思い出したくない”（逆転）“私には未来がないような気がする”（逆転）である。全18項目5件法である。 α 係数は、第1因子から順に.83、.78、.78、.80であり、十分な信頼性と考えられた。

自己決定感を測定する項目 桜井（1993）の作成した「自己決定感尺度」を用いた。育児不安は夫婦関係に規定されること（牧野，1982）など、結婚後の女性は夫との関係に影響を受けることが多くなると予想し、自己決定感を測定する質問内容の「他者」を「夫」にかえて質問紙を作成した。代表的な項目は、“自分に関わる大切なことほど夫に決めてもらうことが多い”である。8項目6件法である。 α 係数は.83であり、十分な信頼性が確認された。

3. 結果

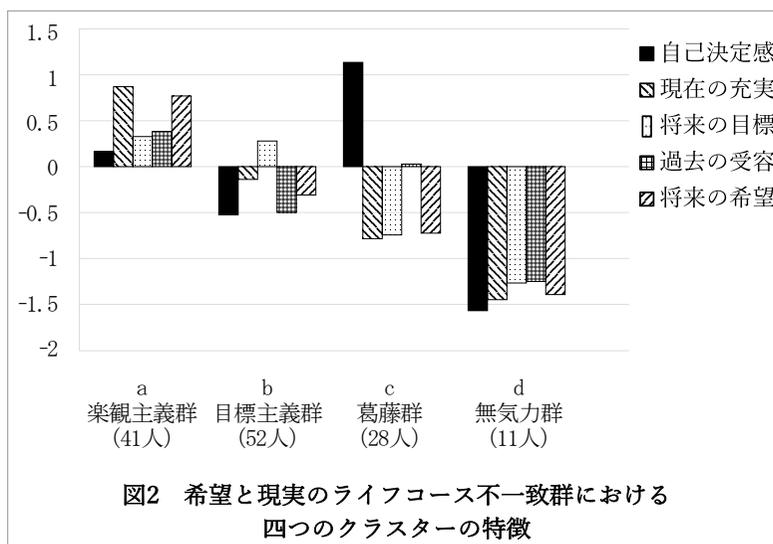
(1) アイデンティティ拡散傾向の母親の時間的展望・自己決定感による類型化

加藤（1983）の分類にしたがって、同一性拡散地位群 276 名を抽出した。希望と現実のライフコースが一致した群 144 名（公民館の育児サロンに参加している母親 70 名，保育園に子どもを預けている母親 74 名）と不一致群 132 名（公民館の育児サロンに参加している母親 57 名と保育園に子どもを預けている母親 75 名）に分け，それぞれに時間的展望の 4 つの下位因子である現在の充実・将来の目標・過去の受容・将来の希望の得点と自己決定感得点を用いて，クラスター分析（ward 法）による群分けを行い，4 群に分類した（図 1，2）。クラスター A は，過去から将来まですべての得点が平均より高いが，その中で過去の受容得点が低いため「過去受容低群」と命名した。クラスター B は，将来の目標が平均より低いため「将来目標低群」と命名した。クラスター C は，現在の充実が平均より低いため「現在充実低群」と命名した。クラスター D は，過去から将来まですべての得点が平均より低いため過去から未来までをネガティブに捉えている可能性が高いと考え「拡散群」と命名した。A「過去受容低群」が 36 人（25.0%），B「将来目標低群」が 54 人（37.5%），C「現在充実低群」が 29 人（20.1%），D「拡散群」が 25 人（17.4%）であった。各クラスター間の特徴を明確にするため，クラスターを独立変数とし，現在の充実・将来の目標・過去の受容・将来の希望の得点と自己決定感得点を従属変数として，一要因の分散分析を行って検討したところ，有意差が見られた。Tukey の HSD 法による多重比較の結果は，現在の充実（A，B>C>D），将来の目標（A>C>B>D），過去の受容（B>A，C>D），将来の希望（A，B>C>D），自己決定感（A > C，B）であった。



不一致群における 4 群は，自己決定感と時間的展望の様相から，希望のライフコースを選択できなかった母親の内面を主観的にとらえた命名とした。クラスター a は，現在の充実，

将来の希望の得点が高く「楽観主義群」と命名した。クラスターbは、将来の目標だけが平均より高いため「目標主義群」と命名した。クラスターcは、自己決定感が標準偏差1を超えており、過去の受容は平均的だが、将来の目標や希望、現在の充実が平均より低いため「葛藤群」と命名した。クラスターdは、自己決定感、過去の受容、現在の充実、将来の目標、希望のすべてが標準偏差-1以下であるため「無気力群」と命名した。a「楽観主義群」が41人(31.1%)、b「目標主義群」が52人(39.4%)、c「葛藤群」が28人(21.2%)、d「無気力群」が11人(8.3%)となった。一致群と同様の分析を行ったところ、現在の充実(a>b>c>d)、将来の目標(a, b>c, d)、過去の受容(a, c>b>d)、将来の希望(a>b>c>d)、自己決定感(c>a>b>d)であった。



(2) アイデンティティ拡散傾向の母親の類型による育児不安の検討

希望と現実のライフコース一致群と不一致群それぞれにおいて、クラスター分析により抽出された四つの類型と育児不安との関連を検討するために、クラスターを独立変数、育児不安の合計得点を従属変数として一要因分散分析を行った(表1, 2)。その結果、一致群においてクラスター間に有意差(F(3, 140)=21.96, p<.001)が確認されたため、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、D「拡散群」はC「現在充実低群」より高く、C「現在充実低群」はA「過去受容低群」、B「将来目標低群」より育児不安が高かった(表1)。

表1 希望と現実のライフコース一致群における各クラスターの育児不安平均値及び分散分析結果

	A 過去受容低群 N=36	B 将来目標低群 N=29	C 現在充実低群 N=54	D 拡散群 N=25	F値	多重比較
育児不安	2.39 (0.40)	2.34 (0.33)	2.75 (0.28)	2.95 (0.41)	21.96***	A, B < C < D

また、不一致群においてもクラスター間に有意差（ $F(3, 128) = 22.38, p < .001$ ）が確認されたため、同様に多重比較を行ったところ、育児不安は d「無気力群」、c「葛藤群」、b「目標主義群」、a「楽観主義群」の順に高かった（表 2）。

表2 希望と現実のライフコース不一致群における各クラスターの育児不安平均値及び分散分析結果

	a 楽観主義群 N=41	b 目標主義群 N=52	c 葛藤群 N=28	d 無気力群 N=11	F値	多重比較
育児不安	2.41 (0.32)	2.67 (0.41)	2.91 (0.39)	3.34 (0.30)	22.38***	a < b < c < d

4. 考察

(1) アイデンティティ拡散傾向の母親の時間的展望・自己決定感による類型の特徴

1) 希望と現実のライフコースが一致した群

希望と現実のライフコース一致群では、過去・現在・将来の中のある時期を肯定的に受け止められない 3 つのタイプと過去から未来のすべてをネガティブに受け止めているタイプの四つのタイプ示された。その特徴は、以下の通りである。

A「過去受容低群」は、現在や未来が肯定的であるため社会的適応はできているが、過去という基盤が揺らぎやすいという脆さを持っているタイプと考えられる。

B「将来目標低群」には、子育て後の自分の人生に目標をもてないようなタイプが含まれていると推察される。大日向（2002）が、近年、子育て期に数年後の自分の姿に展望を持っていないという不安を抱く母親が多いことを報告している。

C「現在充実低群」は、岡本（1997）が母親としての役割だけでは自己のアイデンティティを支えきれないという問題を指摘したように、母親の役割だけでは自分の価値をみだせず、不全感を感じたまま生活を送っているタイプや、再就職した母親が不本意な仕事ゆえに充実感を感じることができないタイプなどが存在していると思われる。

D「拡散群」は、人生全体を肯定的に捉えることができなくなっているが、自己決定はある程度できるため日常生活は適応している可能性が高い。しかし、内面では自己肯定感も下がり、アイデンティティの危機に直面しているタイプと考えられる。

以上、希望と現実のライフコースが一致している群では、過去・現在・未来の一時期だけ肯定的に捉えることができない母親が存在した。比嘉・岡本（2007）は、アイデンティティの感覚の一つの側面に現在が過去に根ざし、過去の上に現在の自分が築き上げられている意識と確信があり、その確信の上に個人の未来が現実的なものとなると述べた。過去・現在・未来の一時期を肯定的に捉えられない母親は、過去の上に次の基盤を築いていくことが困難になり、アイデンティティ達成は難しくなると考えられる。つまり、一時期を受容し、肯定できるような支援が必要である。

2) 希望と現実のライフコースが一致しなかった群

希望のライフコース不一致群では、自己決定感が強すぎるタイプ、弱すぎるタイプが存在

した。一致群と同じように四つのタイプに分かれた。その特徴は、以下の通りである。

a「楽観主義群」は、将来の目標や過去の受容が低く、過去の上に現在や将来を築いているという確信は薄い、希望はあるというような楽観的な面が考えられる。中年期におけるアイデンティティ拡散型で、現実逃避型がある（岡本，1997）が、受容できない過去に目をつぶり、計画もあまり立てない場合は現実から逃避する危険性も持つタイプである。

b「目標主義群」は、自己決定がなかなかできず、過去を受容し希望をもって充実して生きることは難しいが、何とか目標をもち自分を支えているタイプである。適応は一応しているが、内的に不安定な可能性があり、目標という形で防衛している可能性も考えられる。

c「葛藤群」は、自己決定ができるにもかかわらず、将来の見通しが立たず、葛藤が高いと考えられる反面、自己決定感の極度の高さは、自分の現実のライフスタイルを「自ら選んだ」と殊更に思い込ませていたり、夫に依存できず「自己決定するしかない」状態も考えられる。夫婦の関係性など、さまざまな要因が背景にあることが推察される。

d「無気力群」は、自己決定感が極端に低く、自分で決めて歩む気力が薄れ、将来の展望を見だしていこうという意欲すらなくなっていると推察され、積極的な関与を拒否しているような大学生の「アパシー」に似ている（鑑，1990）。

以上、不一致群では、自己決定感が非常に高い場合と低い場合があることが明らかになった。どの領域において自らのアイデンティティを形成するかは、自己決定するという主体性と関連することが報告されており（畑野，2010），自己決定できるということはアイデンティティ形成において重要なことである。しかし、アイデンティティ拡散傾向の母親の中に自己決定が非常に高い母親が存在することが明らかになり、自己決定感が高いにもかかわらず、高すぎる場合はアイデンティティ拡散につながることを示された。自己決定できるという主体性を持ちながらも、希望したライフコースを選択できなかったことを考えると、おかれていた状況や環境、周囲との関係の中で決定した内容は自己一致しているのか、自己決定がどのようにしてなされたのかなど詳細に検討する必要がある。さらにアイデンティティ拡散に至った過程も具体的に把握することも重要であると考えられる。

(2) アイデンティティ拡散傾向の母親の類型による育児不安の検討

希望と現実のライフコース一致群において、類型による育児不安得点の有意差は、D「拡散群」が育児不安が高く、次いでC「現在充実低群」が高かった。A「過去受容低群」とB「将来目標低群」は有意差がなく、過去を受容できないことや将来の目標を持っていないことに関して育児不安の程度に差がないが、現在において充実していない母親は育児不安が高いことが明らかになった。過去・現在・未来の中で現在の充実感を高めることが育児不安軽減に繋がることが示唆され、現在の充実感がすべてのライフコースにおいて育児不安に影響を及ぼすという先行研究（宮本，2013）と一致した。

一方、不一致群では、自己決定が強すぎたり弱すぎたりする母親は、育児不安が高いことが示された。無藤ら（1996）が、複数役割をもつ成人期の女性の葛藤と統合のプロセスに

において、成人期女性にとってのアイデンティティ危機や葛藤が本人個人のものであるというよりは、家族としてのあり方を模索しながら、それに対処していることを示唆した。周囲との折り合いをつけることにより将来の見通しをもつことや状況を受け入れることによって葛藤を小さくすることが、希望や充実感に繋がり育児不安を軽減することが考えられる。極端に高い自己決定の場合、自己決定に無理がないか、自分を偽った自己決定をしていないかなど、自己決定の際の折り合いのつけ方については吟味することが必要と考えられる。

また、玄田（2008）は、家族を含めた社会における人的交流やコミュニケーションのあり方が希望の形成を左右することを示唆し、希望は挫折を伴うものであり、その挫折のありようが幸福感に影響を及ぼすと述べた。自己決定感が極端に低く育児不安が高い「無気力群」のような場合は、家族の中でケア役割に圧倒されていないか、コミュニケーションはとれているかといった家族の視点からアプローチするとともに、挫折経験を伴っていないか、伴うのであればどのように体験することが希望に繋がっていくのかといった視点から検討することも重要である。

5. 今後の課題

今後は、アイデンティティ拡散傾向の母親を現実のライフコース別に類型化し、現実のライフコースに応じた援助の視点を得ることが必要である。

引用文献

- 玄田 有史(2008). 希望と個人(Ⅱ) 社会科学研究, 59, 1-19.
- 畑野 快(2010). アイデンティティ形成プロセスについての一考察 発達人間学論叢, 13, 31-38.
- 比嘉 麻美子・岡本 祐子(2007). 信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス 広島大学心理学研究, 7, 227-243.
- 岩田 美佳(2000). 現代社会の育児不安 家政教育社
- 加藤 厚(1983). 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 牧野 カツコ(1982). 乳幼児をもつ母親と〈育児不安〉家庭研究所紀要, 3, 35-56.
- 宮本 純子 (2008). 乳幼児をもつ母親の育児不安についての研究——ライフコースと自我同一性地位との関連から—— 九州大学心理学研究, 9, 215-221.
- 宮本 純子(2013). 乳幼児をもつ母親の自己決定感が時間的展望と育児不安に及ぼす影響 心理学研究, 84, 176-182.
- 無藤 清子・園田 雅代・野村 法子・前川 あさ美(1996). 複数役割をもつ成人期女性の葛藤と統合のプロセス(その3) 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 124.
- 内閣府(2006). 平成18年版国民生活白書 社団法人時事画報社
- 岡本 祐子(1997). 中年からのアイデンティティ発達心理学 ナカニシヤ出版
- 岡本 祐子(2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房

- 大日向雅美(2002). 育児不安　こころの科学, 103, 日本評論社, 9-15.
- 桜井 茂(1993). 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み　奈良教育大学教育
研究所紀要, 29, 203-208.
- 白井 利明(1994). 時間的体験尺度の作成に関する研究　心理学研究, 65, 54-60.
- 田中 文子(2001). 個人がのびやかに生きる社会に——子育てから新たなコミュニティづく
りを——　現代のエスプリ, 408, 194-203.
- 鑓 幹八郎(1990). アイデンティティの心理学　講談社現代新書
- 都筑 学(1993). 大学生の自我同一性と時間的展望　教育心理学研究, 41, 40-48.